

高校生の英語読解における速読マルチメディア教材と多読教材の効果

杉本 喜孝

京都府立南陽高等学校・附属中学校 〒619-0224 京都府木津川市兜台 6-2

E-mail: yo-sugimoto@kyoto-be.ne.jp

あらまし この実践研究では、マルチメディア CALL 教材を開発した上で、それを用いた速読指導および図書館での授業内多読指導を併用することで、(1) 高校生の英語読解力及び学習方略がどのように変化するか、(2) この速読教材は成績下位層あるいは中位層の一方、または両方の生徒に効果があるかという 2 つの研究課題を設定し、2016 年 4 月から 12 月にかけて実験を行った。速読課題では、マウスをクリックするたびに、PC の画面上にチャンクが現れ、研究対象者はできるだけ速くパッセージを読み、読後すぐに内容理解問題を解答した。次に要約と意見を書き、最後に、自分の英語力に合うよう、2 種類の速度 (natural speed か 7% slowed down speed) から 1 つを選んで、オーバーラッピングでの音読課題を行った。実験後、多くの実験協力者の平均値が 100 wpm を超え、60~70% の正答率を維持していることが判明した。

キーワード CALL 教材, 速読, 多読

The Effect of Rapid Reading Multimedia Materials and Extensive Reading Materials on Senior High School Students' English Reading Comprehension

Yoshitaka Sugimoto

Kyoto Prefectural Nanyo Senior High School

6-2 Kabutodai Kizugawashi, Kyoto, 619-0224 Japan

E-mail: yo-sugimoto@kyoto-be.ne.jp

Abstract This practical study attempts to investigate the effectiveness of a multimedia learning material powered by MS PowerPoint (PPT) developed by the author in conjunction with extensive reading (ER) and other materials on senior high school students' reading comprehension. Special focus was placed on its effect on rapid reading competence and reading comprehension. The author analyzes the influences on learning effectiveness, and discusses the usability of the learning materials used in actual classes from April to December 2016. Comparisons between pre- and post-exposure questionnaires and the results of the rate of increase in words read per minute (WPM) clearly indicated significant improvement in reading strategies, reading comprehension scores, and reading speed.

Keywords CALL material, rapid reading, extensive reading

1. はじめに

平成 21 年 4 月に京都府立城南菱創高校と、京都大学との高大連携事業の一環で、マルチメディア CALL 教材の開発と、それを活用した授業実践が高校、大学双方で始まった。この時の、坪田他 (2010) の研究が基盤となり、今回の実践研究につながった。

これまで、多読および速読に関する研究は個別的に実践・報告される例が多かった。本研究では、速読のための reading strategy を学んだ生徒が、授業内多読に取り組むことで、相互作用がもたらす英語読解力がどのように変化するかに焦点をおいて取り組んだ。

実験協力者（以下、協力者）は日本人高校1年生（うち帰国子女1名）84名（男子50名、女子34名）で、1クラス（42名）を2分割して、1週間で全7コマ（1コマは50分）の英語授業のうち、隔週で1コマを速読、1コマを多読に割り当てて、実験対象クラスとした。

2. 速読演習

2.1 チャンク提示について

ここでは、CALL教室を使用した速読演習について紹介する。

英文の速読スキルを習得する方法はさまざまに研究されてきた。まず、今回の研究では、PowerPoint（以下、PPT）画面上でのチャンクの提示方法を工夫した。湯舟他（2009）はチャンク提示法を採用する英文速読CALL教材は、初級学習者の読解効率の向上に効果があると報告している。また、湯舟他（2007）では、「英文チャンクが順次現れ消える」と「現れ残る」の2種類の提示方法を用いて実験を行った結果、成績下位群では「現れて残る」チャンク提示法がWPMの変化において有意傾向があり、実験後のアンケートでも画面上のチャンクが消える提示法は評価が低かったことを報告している。

北尾（2005）は、英語の読解において、(1) 速く読むことにより、(2) よりよく理解でき、(3) 限られた学習時間を有効に活用し、(4) 内容全体を理解するために、速読は日本人学習者にとって有効であると報告している。

一般的な高校では、関係代名詞節、後置修飾、従属節など、日本語の語順と異なる文構造を苦手とする学習者が多いことから、本研究ではPPTの画面上に「チャンクが現れ残る」提示法を取り入れ、WPMの計測と内容理解問題の正答率を記録し、読解力の変化を上位・中位・下位の3群に分けて検証した。

2.2 速読と音読について

CALL演習の授業の流れを以下に説明する。

(1) オーラルイントロダクション、(2) 新出語句の学習、(3) 速読と内容理解演習、(4) ライティング演習、(5) リスニングと音読演習で、(3)以降のタスクでは、協力者は各自のペースで学習を進める。

(1)では授業者がパッセージの内容を英語で紹介する。(2)はクイズ形式を取り入れた語句演習、(3)では、PPTのリハーサル機能を使い、マウスクリックまたはキータッチにより画面に表示された英文チャンクをできるだけ速く読み、WPMを計測する。読解直後に内容理解問題（多肢選択または内容一致）に取り組み、読解時間および正答数を記録する。(4)では、パッセージの内容について、要約・意見の順にExcel

に入力する。ペアで席を代わり、相手の要約・意見を読んだ上でコメントを入力する。入学初期の1年生の語彙力を考えると、英語でのコメントは内容が薄くなりがちなので、1学期は日本語で書かせ、内容に気を配るようにと指示した。従って、英語での記述は2学期以降とした。(5)では、録音されたパッセージを複数回試聴し、その後オーバーラッピングでの音読課題を行った。音読用のPPTでは英文チャンクと音声がシンクロして画面に現れるため、聞き逃しによるストレスなく取り組むことができる。また、再生速度は2種類（natural speed か -7% slowed down speed）用意してあるので、協力者は自分の英語力にあった方を選ぶことができる。

藤田（2010）は、速読授業を担当する際に、生徒・学生に対して、授業の目的は「速読術」の獲得ではなく、読解力の向上が、速読ではない通常の読みに波及することを指導すべきだと指摘し、速読演習の重要性を次の3点により定義している。(1) 英語の語順に合わせた眼球運動を速くする、(2) このことにより、チャンクごとに英文を理解し、(3) 読解力の向上を実現する。これらの先行研究は、筆者が本研究においてCALL教材を作成する上で、重要な示唆となった。その結果、通常のリーディング授業（コミュニケーション英語I）、多読演習、速読演習の「三位一体授業」が実現した。

2.3 WPMと正答率について

湯舟（2010）は、実社会における「使える英語力」とは、限られた時間内でコミュニケーションを図れる能力と定義し、そのためには100~150wpmが必要であると主張している。藤田（2010）は、先行研究から日本人高校生は60~70%の正答率を伴った150wpm程度を目標値とし、この値を基準に中学生、大学生の目標値を設定すべきだと述べている。これらの数値を参考に、本研究では100~150wpm、正答率60~70%を到達目標とした。

3. 多読について

日本人英語学習者への多読指導による効果について、高瀬（2004）は、読解力の向上、語彙力の強化、モチベーションの向上があると述べている。西田（2012）は、EFL環境の日本では、さまざまな形態による十分な量のinputおよびoutputが行われていないと指摘している。大田（2013）は、日本の高校における英語授業における問題点として、英文構造を文法ベースで解読し、文単位で日本語に置き換えるという点などを例示し、「文法訳読式授業（Grammar Translation Method、以下、GTM）」の弊害を指摘している。

Al-Homoud and Schmitt (2009) は、サウジアラビアの 70 名の EFL 学習者に対して、3 つの異なる出版社の多読用図書 150 冊を用いて実験を行った。この実験から、学生が個人の英語力と同等もしくは下のレベルの英語で書かれた、興味のある図書を読むことで読解力が向上したことを報告している。また読解力の向上が autonomous readers の育成にも一定の効果があり、英語力全般の向上に意味があることを指摘している。

この点に関して、筆者は前任校で高大連携事業に取り組み、Georgios Georgiou 他 (2010) で、高校生を対象に読解ストラテジーの基本を教えた結果、多読の習慣が身につく、読解効率が上がったことを報告した。

山下 (2013) は日本人 EFL 学習者 (大学生 61 名) に対して、500 冊の多読用図書を使用し、授業内多読を実践した結果、英文読解に対する好意的な態度の上昇が見られたことから、日本人学習者にとって多読が一定の効果をもたらす可能性を示唆している。

本研究では、SRA Reading Laboratory 2a を多読教材として使用した。このキットには、ブックレット型の Power Builders (150 冊) と、カード型の Rate Builders (150 枚)、Skill Builders (150 枚) が含まれている。授業では、1 色が 15 冊ずつに色分けされた Power Builders (全 10 色) を使用した。レベルに応じて語数が増えていく仕組みで、自然科学、物語、生態系、宇宙などさまざまなトピックが用意されており、150 冊全てを読むと総語数は 98,971 語となる。協力者は好きな本を選んで自席で読み、読後には付属の内容理解問題を解答する。その後、読解時間、正答率、コメントを記録し次の本を選ぶという手順で取り組んだ。

4. 研究課題

Warring (2011) は、読解力の向上を目指すには、同じ語彙やフレーズに何度も触れる必要があることから、多くの読解教材で学ぶ必要性を述べている。また、Powell (2005) は、多読は読解力向上に加え、話す・書く・聞く活動の基礎を成していると報告している。

西原他 (2013) は、成績下位群の大学生は文法能力が低く、フレーズごとに英文を読み進めることが苦手であることを発見し、この問題に取り組むため、PC 画面上で、主部・述部・修飾語句を色分けして提示する速読教材を作成した。これは、He is an excellent baseball player. のような英文 (SVC 構造文) で、He (黄)、is (赤)、an excellent baseball player (青) のように色分けされたものが現れるというもので、実際にはもっと長い英文で取り組むものである。筆者は前任校での CALL 授業で Plato 社製『えいご漬け』シリーズを使用した。これは語順の基本パターンや文法を学べる教材で、上記 (西原他 2013) と同様の仕組みである。

これらの速読および多読における先行研究を参考に、筆者は次の研究課題を設定した。

(1) 多読演習と速読演習を通常のリーディング授業に併用することで、生徒の読解力および学習態度の向上に好影響があるか。

(2) 速読教材は全ての生徒もしくは下位群または中位群のいずれかのみにも効果をもたらすか。

5. 実験データについて

協力者のうち、1 名の帰国生を除く 83 名のデータを使用し、リサーチペーパーにおいて以下の報告を行った。多読演習では、読解時間、読破語数、内容理解問題の正答数、及び感想を記録した。速読演習では、読解時間、内容理解問題の正答数、パッセージの要約、及び録音音声を記録した。これらの数値データに加えて、プレ・ポストアンケートを 4 月、11 月に実施した。

5.1 多読データ

帰国生を除き、実験期間中に使用教材 150 冊の総語数 98,971 語に達したのは 2 名であった。協力者の平均読破語数は 28,083 語であった。

使用した Power Builders のうち、1 冊あたりの語数が少ない Brown を例にとると、総語数は 5,600 語、1 冊の語数は 300 語～490 語で、readability は最も低い 1.2～2.4 となっている。

30,000 語を超えた協力者 (15 名) を例にとると、難易度および語数から考えた中位レベルに属する Purple もしくは Violet に達している。Purple では、総語数は 10,500 語、1 冊の語数は 500～900 語、readability は 2.4～4.2 である。同様に Violet の総語数は 10,400 語、1 冊の語数は 500～1,000 語で、readability は 2.6～4.7 となっている。

このレベルの協力者は実験期間 (全 19 回) を通して約 60 冊を読破していることになる。1 コマ平均 3 冊で、最も語数の少ない 3 冊を選んで読んだ場合の語数でも、1 コマでの読破語数は 900 語を超える。通常のリーディングクラスで使用される中位レベルの文科省検定済教科書を例にとると、1 レッスン (平均 4 パート) の総語数は 400～500 語である。これを多くの高校で見られる GTM 授業の「1 コマ 1 パート」で換算すると、1 コマで生徒が「見る」英文は 100 語程度となる (あくまで、「目にする」という意味。理解を伴った読みである保証はない)。そこで、通常のリーディング授業のみの場合と単純比較した場合、これらの協力者は、内容理解を伴った読解に取り組み、約 9 倍の語数の英文を読んだことになる。平均語数に達した生徒では、約 6 倍の語数となる。

5.2 速読データ

本研究では、4月時点の読解速度を調査し、WPMに応じて、上位群（Higher-Level:150wpm 前後）、中位群（Mid-Level:100wpm 前後）と、下位群（Lower-Level:50wpm 前後）の3群にグループを分けた上で、実験期間中を通じて、毎週オーバーラッピング活動をさせると共に、読解速度測定と理解度テストを実施し、WPMの変化を追った。協力者84名のうち、実験期間内に正確なデータ（欠席や記録欠損のない協力者）を得られたのは67名であった。

下位群では100wpm、中位群は120wpm程度まで上昇した（初回と最終回のデータそれぞれで1%水準で有意差あり）。図1、2に下位群、中位群のWPMと正答率の変化を示す。（縦軸がWPMと正答率、横軸は実験回を示す。以下、図3、図4も同様）

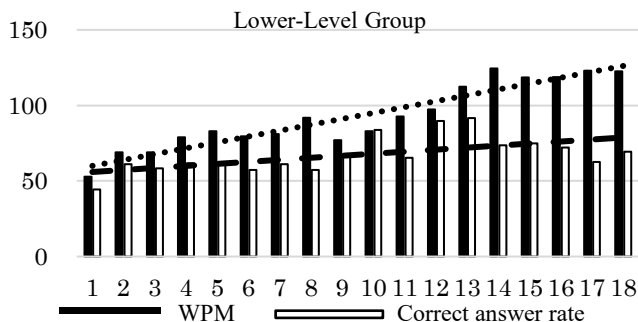


図1 下位群のWPMと正答率分布

下位群では、初回52.9であった平均wpmが93.1に上昇し、2学期に入ってから、13回目以降の演習で100wpmを超えている。平均正答率は、44.4から67.4に上昇した。

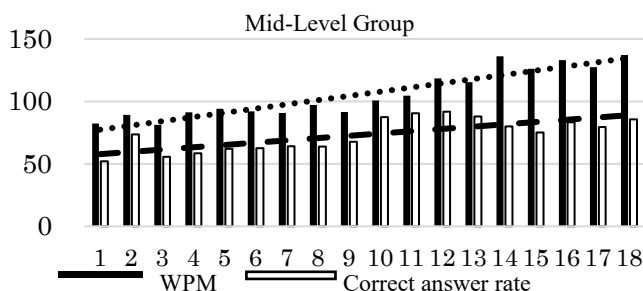


図2 中位群のWPMと正答率分布

中位群では、初回82.4の平均wpmが106に上昇し、10回目以降の演習で100wpmを超えるようになった。平均正答率は、52.1から73.4に上昇した。

上位群では、初回134.6の平均wpmが179.3に上昇し、平均正答率は、66.7から80.3に上昇した。また、14回目以降の演習では、おおよそ200wpm程度まで速度の上昇が見られた（初回と最終回のデータで有意差

なし）。図3に上位群のWPMと正答率の変化を示す。

下位群のWPMの伸び方を見ると、中位群のそれと同様の軌跡を辿っていることが判明した。さらに、8、13、17回目の実験クラスで下位・中位の平均WPMが同じ値を示している。そして、4月時点では中位群、下位群にあった有意差が、最終的には見られなくなった。図4に3群のWPMの変化を示す。

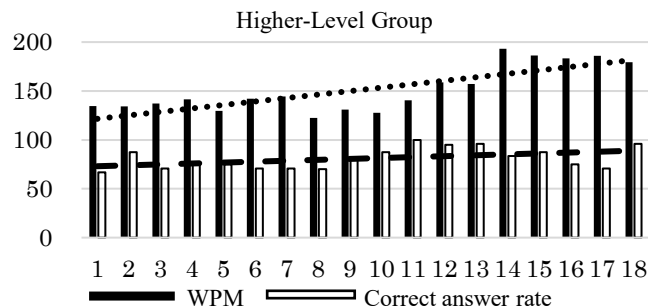


図3 上位群のWPMと正答率分布

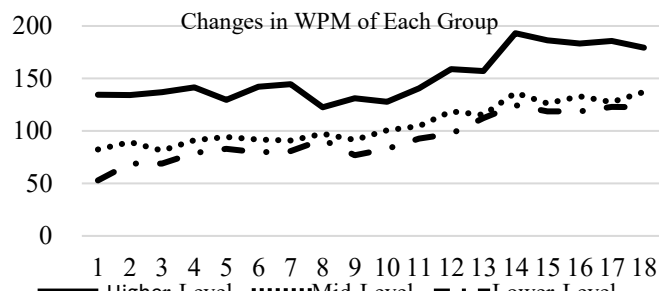


図4 3群のWPM変化グラフ

語彙サイズについては、望月テスト第3版（Level 4000）を用いて、プレ・ポストの比較を行ったが、有意差は見られなかった。以上により、中位群、下位群に関して、教材の効果等から速く読めるようになったと考えられる。

次にWPMと正答率の相関を見てみると、図5のようになった。協力者全体で見ると、強い相関は見られなかったが、3群分けると、中位群では強い相関($r=.720$ 、 $p<.01$)が見られた。下位群では緩やかな相関($r=.554$ 、 $p<.05$)があり、上位群では相関は見られなかった($r=.245$ 、NS)。（縦軸はWPM、横軸は正答率を示す）

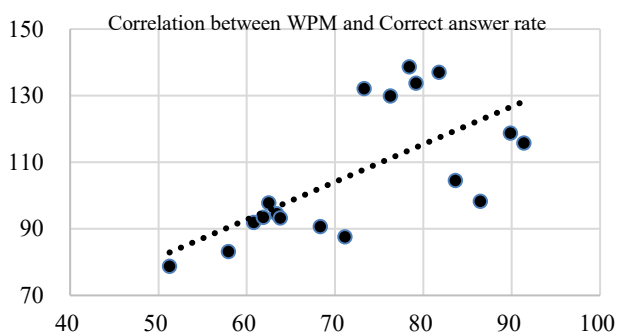


図5 WPMと正答率の相関分布

5.3 アンケートデータ

本研究では、英語能力の変化と同時に情意面での変化を見るため、4月にリッカート尺度（5件法）によるプレアンケートを実施した。アンケート項目は、(A) 英語が好き・嫌い、(B) 得意・不得意、(C) 英語を読むときの習慣、(D) 英語学習への期待、(E) 家庭学習習慣、(F) 中学校での英語授業に関するものという、6つの category に分類される。このうち、事後に協力者の情意面の変化が現れると予測できる、(A)～(C)の29項目を使ったポストアンケートを実験後に実施した。欠席等により両方のアンケートに答えていない11名を除く73名を *t* 検定により分析した結果、次の4項目において有意差が認められた。

No.16「英文を読んでいて、知らない語句があれば、すぐに1語ずつ調べる」($t(73)=3.445, p<.01, \Delta=-.49$)、No.21「英文を読む時に、自分の持っている知識と英文の内容を関連付けて読んでいる」($t(73)=-2.660, p<.01, \Delta=.34$)、No.27「英文を読む時に、文法的な切れ目を意識して読んでいる」($t(73)=-2.311, p<.05, \Delta=.27$)、No.29「英文を読む時に、あまり辞書に頼らなくても読むことができる」($t(73)=-6.219, p<.01, \Delta=.82$)。

No.16では、知らない単語は1語ずつ「調べる」と答えた協力者の割合は33%から28%にやや減少したが、「調べない」と答えた割合は31%から41%に増加した。この結果は Nuttall (1996) の指摘する優れた読み手の資質につながる可能性を示している。No.21では、肯定的に答えた協力者の割合は69%から81%に上昇した。同様に、No.21ではその数値は29%から49%に上昇した。No.29では、プレアンケート時の肯定的回答はわずか16%だったが、ポストアンケートでは、51%が辞書に頼らなくても読むことができると回答している。

これらの結果は、実験の一定程度の有効性を示して入るものの、情意面での変化とWPMや語彙サイズの変化と他の測定項目との関連についても調査したが、有用な知見は得られなかった。今後は生徒がつまづいている部分をより詳細に調査した上で、より効果的な教材を作成していければと考えている。

6. 考察と結論

高校生は「将来は英語を使う仕事に就きたい」と、ばく然とした夢を語ることもある。本研究を通して、明らかになった興味深い実態を紹介する。

まず、協力者のうち44%が「英語は好き」と答えているにも関わらず、語彙や文法学習が「好き」と答えた割合は24%、「嫌い」が41%に上った。また、語彙やイディオムの暗記が「得意」は28%、「不得意」は40%となった。このことから、外国語学習の基礎トレーニングを嫌う傾向にある学習者に対して、モチベーションを維持させることの難しさが浮き彫りになっている。従って、十分な量の学習教材を多様な形で提供することが求められると考える。

次に、英語学習の目的に関して回答数の多い上位3つは、「大学入試」(53%)、「外国の人とのコミュニケーション」(41%)、「読解力向上」(37%)となっている。これらの実現には、語彙・語法、文法学習が欠かせないが、全体のうち85%が教科書以外のテキストは読まず、89%がメディアを活用した英語学習はしないと回答している。「なりたいが、したくない」という矛盾した意識が浮き彫りになった形と言える。

3つ目に、中学時代の英語授業に関して回答数の多い上位3つは、「英語授業は好き」(52%)、「文法の授業は好き」(48%)、「ALTとの⁽¹⁾TTは好き」(40%)となった。⁽¹⁾日本人英語教師とALTとの共同授業。

しかし、「スピーキング授業が好き」との回答は28%にとどまっていることから考えると、TTで道案内や買い物表現を“楽習”することが人気を博したのはひと昔前で、意見やコメントを求められ、瞬時に口頭での返答が必要なタスクは嫌がる傾向にあるようだ。ここでも上述した回答とは矛盾する結果が現れた。

上述した実態の改善に向けて、本研究で取り組んだ速読・多読演習の併用は、学習者に与えるタスクの多様さと量に関しては一つの示唆となる。多読演習の中でもWPMを計測・記録をしておけば、さらに詳細な読解力の調査が可能であった。読破語数と内容理解問題の正答率やWPMの変化に相関関係があるかという点についても、筆者の力不足から実証できていない。これらについては今後の研究に継続していきたい。

また、金谷他(1994, 2008)では、多読プログラムの効果が現れるには潜伏期間(およそ6ヶ月後から)があり、多読の効果が現れると、多読学習と通常の英語学習のみの場合、同一テストにおける差は時間の経過と共に伸びていくことを報告している。その意味でも、本研究の継続の必要性は否定できないと考える。さらには、私立の中高一貫校で実践されている例もあるが、公立校でも中高連携による多読プログラムが実

施できれば、中学校での多読、高校では多読プラス速読を組み合わせた実践研究が実現可能であると考えられる。

ここまで、数値データと共にアンケート結果の分析、本研究の限界などを述べてきた。その中で、今回の実践研究が協力者の読解速度と理解度の伸長、英文読解に対する態度の変化への一助となったことを報告した。また、実践校で作成した CALL 教材は京都府教育委員会を通じて、他の府立高校や私立高校、大学等（平成 29 年 6 月現在、計 17 校）にも提供してきた。

近年は、ウェブ上の英文ページを教材としてワープロソフトに貼り付け、表計算ソフトに読語数や読解時間を記録する等、ICT を利用しながら多読・速読の学習履歴を自動的に記録し確認できるシステムも構築されている（岡崎 2009）。今後は、このような知見や他校とのつながりから得られたフィードバックを元に、より効果的で学習者が使いやすい、そして授業者が改訂しやすい教材作成へと発展させていきたい。

7. おわりに

本研究の速読・多読実践に中等教育の現場で高校同士あるいは中高連携という枠組みの中で協調的に取り組むことは意義深いと考える。そうした協力関係の中からフィードバックを得て、読みのスピード向上と情報の正確な読み取りを、話す・書くというアウトプットにつなげるなど、英語力全般の向上を図ることを模索していきたい。

文 献

- [1] Al-Homoud, F., and Schmitt, N.: Extensive reading in a challenging environment: a comparison of extensive and intensive reading approaches in Saudi Arabia. *Language Teaching Research*, vol.13, no.4, pp.383-401, 2009
- [2] Georgios Georgiou, 坪田康、杉本喜孝、壇辻正剛、“Reading strategy instruction and extensive reading in high school education in Japan”、多読・多聴による英語教育改善の全学展開、豊田工業高等専門学校、2010
- [3] SRA Reading Laboratory 2a, McGrawHill
- [4] Takase, A., Investigating students' reading motivation through interviews, *Forum for Foreign Language Education*, Vol. 3, pp.23-38
- [5] Waring, R., Extensive reading in English teaching, Innovation and creativity in ELT methodology, pp.69-80
- [6] Yamashita, J., Effects of extensive reading on reading attitudes in a foreign language, *Reading in a Foreign Language*, Vol. 25, No. 2, pp. 248-263, 2013
- [7] 相澤一美 & 望月正道. 英語語彙指導の実践アイデア集—活動例からテスト作成まで、大修館書店、東京、2010
- [8] えいご漬け、プラト株式会社、東京、2002
- [9] 藤田賢、“速読指導”、リーディング指導ハンドブック、門田修平、野呂忠司、氏木道人（編著）、pp.233-244、大修館書店、東京、2010
- [10] 今村一博、“高校生に対する多読指導と情意、使用する読解ストラテジーに認識との関係：縦断的研究”、Vol. 44、pp.87-106、外国語教育メディア学会機関誌、2007
- [11] 今村一博、“高校在学中の英語多読が大学生へ及ぼす情意面への影響”（実証研究、第 40 回全国英語教育学会徳島究大会）、Vol. 44、pp.217-224、中部地区英語教育学会紀要、2015
- [12] 金谷憲、英語教育熱、研究社、東京、2008
- [13] 金谷憲、長田雅子、木村哲夫、葉袋洋子“中学生英語多読プログラム：その動機づけと読解力への影響”、Vol. 8、pp.39-47、関東甲信越英語教育学会研究紀要、1994
- [14] 金谷憲、長田雅子、木村哲夫、葉袋洋子“英語多読の長期的効果：中学生と高校生プログラムの比較”、Vol. 9、pp.21-27、関東甲信越英語教育学会研究紀要、1995
- [15] 北尾謙治、“WEB による英語速読プログラムの開発”、言語文化、Vol. 8、No. 1、pp.114-116、2005
- [16] 長井千枝子、“音声併用フレーズリーディング指導の有効性に関する実証的研究”、Vol. 45、pp.33-39、甲南女子大学研究紀要 文学・文化編、2008
- [17] 中森誉之、学びのための英語学習理論 つまづきの克服と指導への提案、ひつじ書房、東京、2009
- [18] 中森誉之、外国語音声の認知メカニズム 聴覚・視覚・触覚からの信号、開拓社、東京、2016
- [19] 檜和千春、“CALL による英作文指導の利点と検討課題：1999 年度京都大学全学共通科目英語 II における実践を例に”、ことばと文化、Vol. 5、pp.189-208、京都大学学術情報リポジトリ、2001
- [20] 望月正道、“日本人のための語彙サイズテスト”、財団法人語学教育研究所紀要、Vol. 12、pp. 27-53、1998
- [21] 西田晴美、“音読による多読実践学習者の体験プロセス”、Vol. 55、pp. 129-138、JACET JOURNAL、2012
- [22] 西原俊明、西原真弓、井上憲司、“電子化教材が英語学習に及ぼす効果について”、長崎大学言語教育研究センター紀要、Vol. 1、pp.67-74、長崎大学学術研究成果リポジトリ、2013
- [23] 野呂忠司、“多読・速読指導”、リーディング指導ハンドブック、門田修平、野呂忠司、氏木道人（編著）、pp.186-187、大修館書店、東京、2010
- [24] 及川賢、“英語多読が高校生へのリーディングストラテジーの変化に与える影響”、Vol. 9、No. 1、pp. 163-170、埼玉大学紀要、教育学部、2010
- [25] 岡崎弘信、英文多読・速読を効果的に行うための e-ラーニングシステムの開発、*英語英文学研究*、33(2)、85-96、2009
- [26] 大田悦子、“高校に於ける文法訳読式授業を考える：現状と課題”、Vol. 38、pp. 41-52、白山英米文学、東洋大学文学部紀要、英米文学科篇、2013
- [27] 杉本喜孝、“The Effect of Rapid Reading Multimedia Materials and Extensive Reading Materials on Senior High School Students' English Reading Comprehension — A Practical Study at a Public Senior High School —”、言語と言語教育をめぐって、Vol. 10、pp.33-61、立命館大学大学院言語教育情報研究科、2017
- [28] 鈴木寿一、門田修平、英語音読指導ハンドブック、鈴木寿一、門田修平（編著）、大修館書店、東京、2012
- [29] 坪田 康、Georgios Georgiou、杉本 喜孝、木村 博

保、平岡 齊士、壇辻正剛、“ステップワイズ型英語プレゼンテーション学習の試み ―高大連携の一環として―”、第 25 回日本教育工学会 全国大会、1a-243-08、pp.205-206、Sept. 2010.

- [30] 山口高領、“英語チャンクの文字と音声との同時提示直後の一斉音読による WPM 上昇効果と学習者の認識の変化”、Vol. 11、pp.15-26、Dialogue、2012
- [31] 湯舟英一、神田明延 & 田淵龍二、“CALL 教材における英文チャンク提示法の違いが読解効率に与える効果”、外国語教育メディア学会機関誌、44、215-229、2007
- [32] 湯舟英一、神田明延 & 田淵龍二、“CALL によるチャンク提示法を用いた英文速読訓練の学習効果”、外国語教育メディア学会機関誌、46、247-262、2009
- [33] 湯舟英一、“英文速読におけるチャンクとワーキングメモリの役割”、Vol. 9、 pp.1-20、Dialogue、2010